

だいし

大師遺跡通信

拡大版

平成21年11月27日(金)

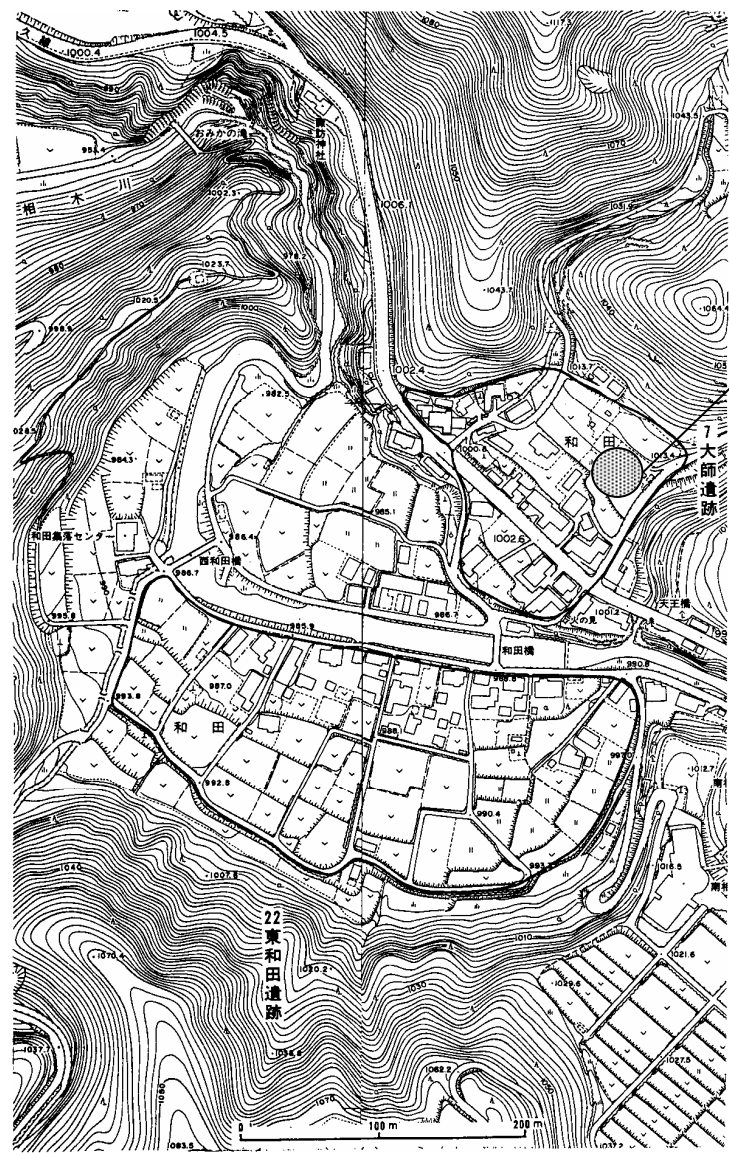
村誌編調査員 藤森英二・堤 隆

発掘調査までの流れ

村では平成20年から、「南相木村誌・歴史編」の編纂を開始しています。しかし、南相木村で最も古い歴史となる、原始・古代(主に縄文時代から平安時代)については、土器などが採集されている以外、具体的な内容はほとんど不明のままです。そこで編纂室では、遺跡の発掘調査を計画しました。これによって、これまで知られていなかった、南相木の古い時代を探ろうという訳です。

大師遺跡とは

現在の和田地区に位置する大師遺跡は、古くから^{やしり}鎌などが拾える場所として知られていました。また昭和37年の道路工事の際には、石垣付近に炭などをともなう住居址(?)の断面が記録されています。また村教育委員会では、平成11年に遺跡の分布調査報告書を出していますが、この場所も当然遺跡として記載されています。そして、今回の発掘調査にふさわしい場所として、大師遺跡が選ばれたのです。



平成21年度 発掘調査区

調査による発見の数々

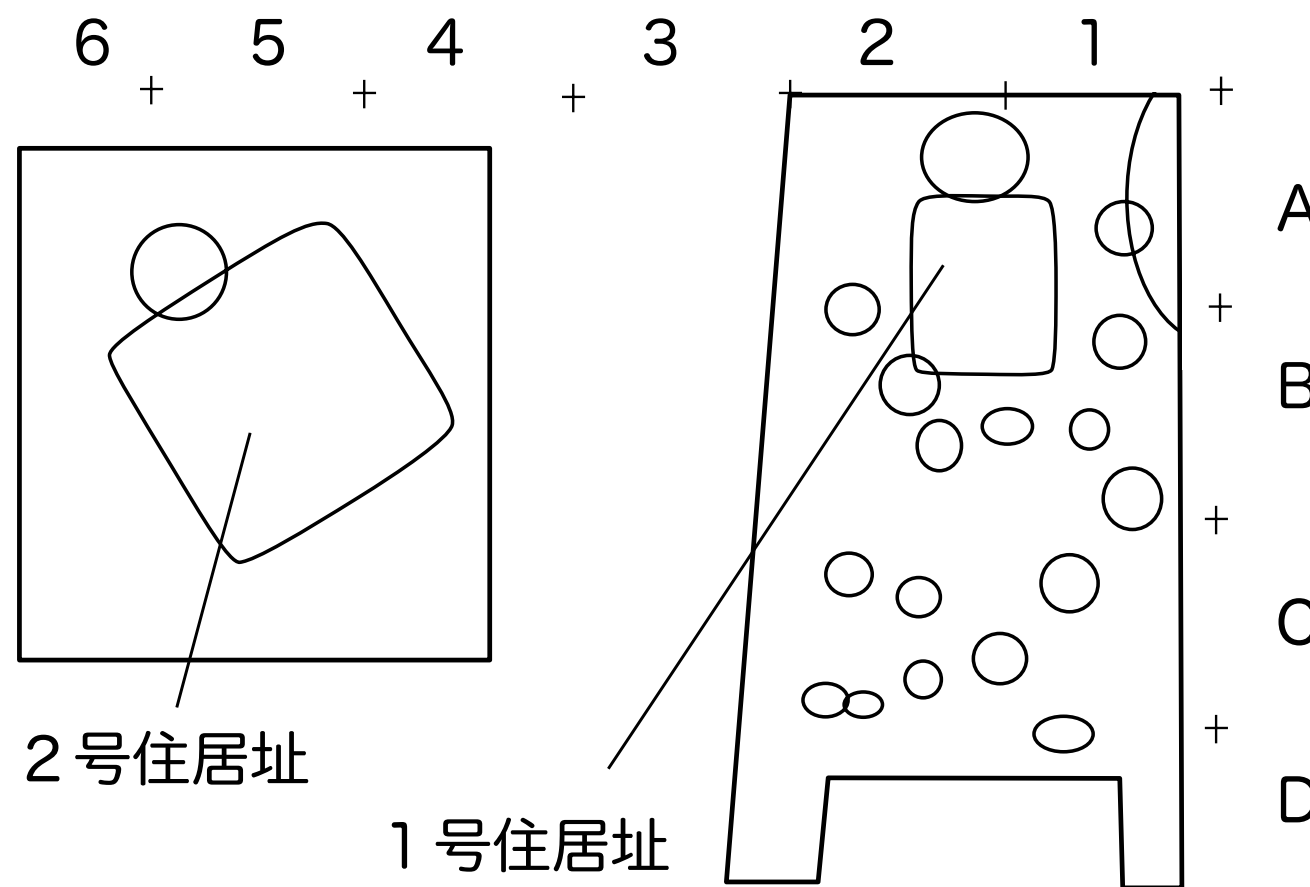
平成21年4月に試掘調査を行い、11月より、村内の皆さんを中心としたメンバーによる本格的な発掘調査を開始しました。すでに試掘調査で、縄文時代前期(およそ5500年前)の土器が見つかっていましたが、調査では、これらの土器を残した人びとの生活の跡を見つけることが課題とされました。そのため、「地山」と呼ばれる赤土(ローム層)まで重機と手掘りで掘り下げ、住居の跡など(遺構)を探していきました。その結果、現段階では以下のような遺構が見つかっています。

- ・縄文時代土坑 16基以上
- ・平安時代住居址 2軒
- ・時期不明の掘り込み 1基

縄文時代

縄文時代では、^{どこう}土坑が16基以上見つかっています。いずれも出土した土器から5500年前から5000年前の縄文時代前期後半のものと思われます。これはお墓か、食料などを入れる室かもしれません。また時期不明の掘り込み遺構から大量の土器が出土しています。土器はいずれも丁寧に作られており、造形的にも目を見張るものがあります。

さらに土器の洗浄作業により、縄文時代早期(約9000年前)の土器も確認出来ました。現在村では最古の遺物です。



平安時代

平安時代、約 1000 年前の竪穴住居址が2軒確認されています。煮炊きをしたカマドも残されていました。また1号住居址は廃棄された後、火をかけられており、炭化した木材も生々しく残されていました。さらに日常の土器だけでなく、灰釉陶器かいゆうとうきという、珍しい陶器も確認されています。2号住居址は拡張していた様子も伺えました。

まとめと今後の期待

縄文時代では、約 9000 年前から人々がこの地を利用し、5500 年前には台地上に沢山の穴（お墓むろや室？）を掘っていました。木の実や動物など、豊かな山の幸に恵まれていたのでしょう。付近には未発見の住居もあったと考えられます。

その後、稲作が始まった弥生時代以降、水田に適さない南相木などの山間地では、遺跡の数が減少しますが、今回の調査では、10 世紀頃には、南相木で生活していた人々がいたことが明らかになりました。村の歴史を作ったパイオニアのムラと言えそうです。

このような事実は、大師遺跡の発掘調査で初めて明らかにされました。さらに、遺跡は台地全体に広がると思われる、未調査の区画には、さらに別の遺構も存在すると思われます。南向きの緩斜面で、日照時間も長く、生活に適した場所だったのでしょう。

村の歴史を語るのに欠かすことの出来ない貴重な財産として、大切に残していきたいものです。